

# 公益財団法人日米医学医療交流財団 アメリカ短期看護研修助成

## 研修報告書 (2017年度 助成者)

作成日 2017年11月4日

氏名 (フリガナ)	大山薫
研修地	アメリカ・オレゴン州ポートランド市
研修期間	2017年10月8日(日)～10月14日(土)
所属機関名	名古屋徳洲会総合病院 手術室 4年目
身分	なし

今回アメリカ短期看護研修に参加し、日本とアメリカの医療現場における大きな違いを知ることができました。例えば、日本では一人ひとりの患者さんとの関わりに重きを置き、日常ケアを通じて信頼関係を築き、個別性に合わせた最善の看護を導き出すことが求められています。しかし、アメリカでは業務が細かく分業化されており、看護師は治療の補助や患者アセスメントを主に行っていました。看護師も医師と同等の知識を持ち、必要な治療を医師と話し合いながら行っているという印象を受けました。

また、保険制度が日本と大きく異なることで、必要な治療をできるだけ最短で受けたいという患者さん側の思いも感じることができました。日本では少しでも身体の異変を感じたら病院に受診し、薬を処方してもらったり入院して経過観察したりと手厚い医療を受けることができます。しかし、アメリカでは医療費が高いことから、重症化してから来院するケースが多く、さらにできるだけ入院することを避けたいため必要な治療を受けた後は院外で経過観察することが多いということを知りました。一方で、病院に受診する前に電話でのトリアージを受けることができ、電話で対処できることはアドバイスし、新たな治療が必要であると判断された場合は来院することを勧めるシステムがあり、必ずしも来院することがベストではないという選択肢も整えられていました。また、プロヴィデンス・ポートランド・メディカルセンターにおいて「急性脳卒中センター」についてレクチャーを受けた際に、入院期間が短いことで入院中に食事などの患者教育を行うことは難しいが、外来ベースのクリニックが患者教育を担うなど、日本にはないシステムで予防教育が行われていることを知ることができました。これらのことからアメリカと日本の医療体制と比べると、来院時から退院、さらに通院などすべての過程において医療システムも治療への考え方も異なることがわかります。アメリカと日本の医療保険の背景が大きく異なることで生じているシステムの違いであるものの、アメリカの合理性も日本に必要なようになってくるのかもしれないと考えることができました。

さらに、ポートランド大学看護学部の見学を通して驚いたことが、患者ロボットを使い急変対応などのシミュレーションを行っていたことです。私自身患者ロボットを使ってシミュレーション訓練を行ったことがありますが、専門領域としての訓練の過程であったことから、看護学生の時点で求められているレベルであるというところに驚きました。自分の経験を振り返ると、看護学生の頃は患者アセスメントを訓練しましたが、実際の実習では足浴などの日常ケアにとどまっていました。そのため、看護師として働き始めてから急変にあたったときに冷静な判断を行うことが難しく、医師からの指示を仰ぐことしかできませんでした。しかし、アメリカではほとんどの教育機関が患者ロボットを活用し、急変時の自分の動きを客観的に分析し、必要な治療を導き出し、医師に報告するところまでしっかりと訓練されていることを知りました。こういった教育によって、卒業後から即戦力として重症化した患者に対しても冷静な判断が行える看護師が育成されていることがわかりました。

今回さまざまな施設見学を通して、医療従事者全体が医師と同等の知識や判断能力を持っていることを実感し、常に最善の治療を導き出していることがとても印象的でした。また、日本だからこそ行える看護もあるということも実感し、医療に対する考え方を深めることができました。

この研修に携わってくださった多くの方々に感謝するとともに、この経験を日々の看護に生かしていきたいと思えます。